

社会的実践力をもつ子どもの育成を目指した 社会科学習の指導方法に関する研究

- 人と共感的にかかわる学習活動を通して -

伊万里市立大川小学校 教諭 羽田野 修

要 旨

本研究は社会科学習において、社会的実践力をもつ子どもを育成するために、学習過程における交流活動の在り方について研究したものである。そこで、本研究では、問題解決的学習の「感じる」過程で人物との共感的な交流活動、「調べる」過程で友達と考えを相互に交流する活動、「深める」過程で人物の思いや価値観に触れることができる交流活動の3つの交流活動を設定した。

その結果、子どもたちの社会事象に対する認識を深め、より意欲的に学習に取り組む姿が見られるようになった。同時に、認識したことを基に、より深い見方や判断ができるようになった。

<キーワード> 社会的実践力 問題解決学習 交流活動 共感

1 主題設定の理由

「生きる力」を育成するために、社会科学習では「事実を正しくとらえ、基礎的な知識を得る力（見つけ・知る力）」、「社会的な事象から学習の問題を見いだして追求し、それを表現する力（追求・表現する力）」、「社会的な事象を多面的にとらえ、公正に判断する力（思考・判断する力）」を身に付けさせていく必要がある。本研究では社会科で培うべきこれらの力を総合して「社会的実践力」と呼ぶことにした。

社会科学習では、以前から「調べ方を身に付ける学習」、「体験的な学習」、「問題解決的な学習」などを重視した授業が実践されてきた。しかし、上述したような力が、その後の学習や生活に十分に生きて働いていたとは言えない。

そこで、本研究では学習過程の中で意図的に交流活動を設定することで、子どもたちの社会的な事象にかかわる意欲や思考力が高まると考え、本主題を設定した。

2 研究の目標

社会的実践力をもつ子どもを育てるために、交流活動を取り入れた問題解決的学習の在り方を探る。

3 研究の仮説

問題解決的学習の過程において、次のような交流の場を設定すれば、社会的な見方や判断力、社会的な事象に積極的にかかわろうとする力が育つであろう。

学習問題を発見する（感じる）過程で、問題にかかわりをもつ人物と共感的な出会いができる場。

原因の探求をする（調べる）過程で、友達と互いの考えや意見を交流する場。

価値を究明・判断する（深める）過程で、人の思いや価値観に接することができる場。

4 研究の内容と方法

社会的実践力を育てる問題解決的学習の考え方・進め方の研究。

第4学年単元「ごみのしまつと利用」で交流活動を取り入れた検証授業を実践し、仮説を検証する。

5 研究の実際

(1) 社会的実践力を育む問題解決的学習

ア 社会的実践力と社会科の学力

これからの社会科は、自ら学び、自ら考える力を育成する事が大切である。この力は子ども一人一人が社会的事象に関心を持ち、問題を正しく見つめ、論理的に思考・追求し、適切な判断をし、自分なりに表現していく中で培われていく。そこで、社会科で培う力を図1のように考えた。意欲や関心をもってこの3つの力を育成し、伸ばしていくことが、子どもたちの社会的実践力を高めていくことになる。すなわち、社会科で培うべき3つの力を総合したものが社会的実践力であると考え。

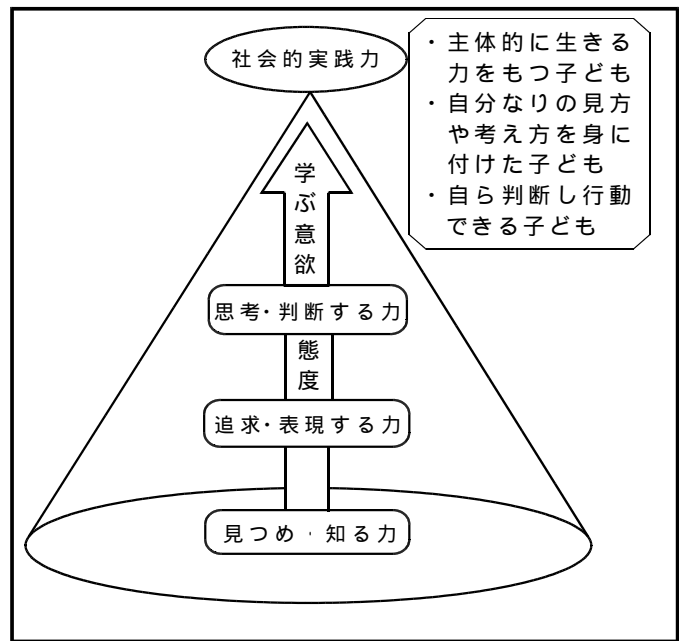


図1 社会的実践力を育むための社会科の力

イ 問題解決的学習の学習過程と育てたい子ども像

社会的実践力をはぐくむ問題解決的学習の過程と、それぞれの過程で育てたい子ども像を図2のように考えた。授業ではどの過程においても、図1で示した「見つめ・知る力」「追求・表現する力」「思考・判断する力」の3つの学力を相互に作用させながら進めることになる。この問題解決的学習の過程では、特に「深める」過程を大切にしていきたい。問題に対して自分なりに思考し判断していくこの過程の学習が、子どもたちの社会的実践力を高める大きな力になっていくと考えるからである。

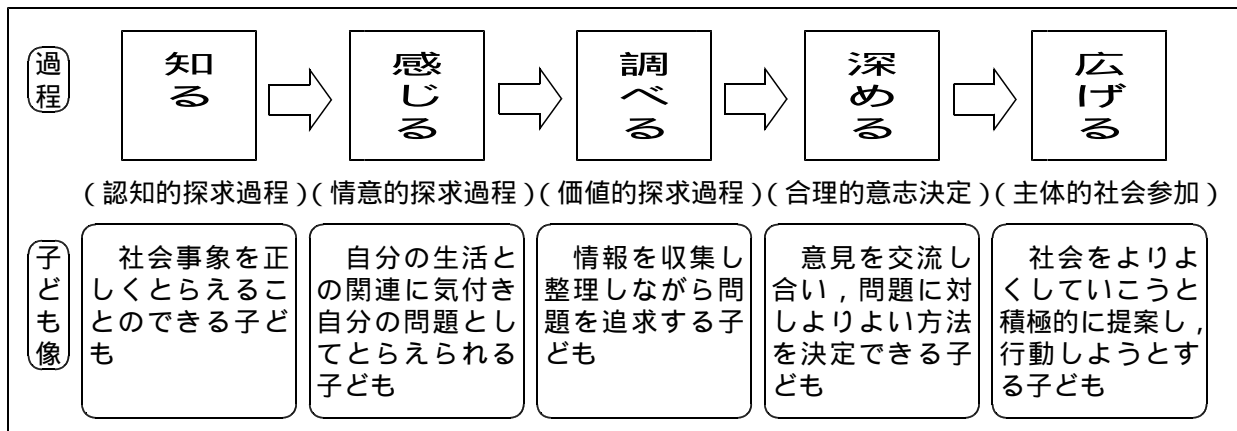


図2 社会的実践力をはぐくむ問題解決的学習の過程と育てたい子ども像



(2) 問題解決的学習における交流活動

本研究では問題解決的学習の各過程で表1のような交流活動を取り入れていく。このように問題解決的学習の過程において人との交流を意図的に取り入れ、社会科の学習計画を仕組んでいくことが、社会的実践力をはぐくむ上で大切であると思う。

表1 問題解決的学習の各過程における交流活動

学習過程	交流の内容
「感じる」	人物と共感的な交流をすることにより、学習問題を明確にしたり、問題解決への意欲を喚起する。
「調べる」	友達と考えを交流することで、問題解決への手掛かりを見付けたり、問題に対する自分の考えを見つめ直す。
「深める」	人物から意見や助言をもらえるような交流を行うことで、行動案の作成の手掛かりにしたり、行動化に向けての意欲を高める。

(3) 交流活動を取り入れた単元構想……第4学年「ごみのしまつと利用」(全19時間)

学習過程と主な学習活動	
<p>知る</p> <p>学習問題 1 「環境センターに集められたごみはどのようにしゅりされているのか調べ、分別収集のひみつをさぐる。」 ごみ収集の様子を見学する。 分別収集されたごみがどのように処理されているのか調べ、発表する。</p> <p>感じる</p> <p>増え続けるごみの問題について話し合う。 生活や身近な地域でのごみ減量の取組について話し合う。 「はちがめプラン」福田さんと共感的な交流をする。〔検証授業1〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・福田さんについて知る。 ・福田さんと交流をする。 ・福田さんとの交流を振り返る。 <p>調べる</p> <p>学習問題 2 「環境を守っていくために私たちにできることを見つけよう」 環境を守るための話し合い「大川環境シンポジウム」を開くことを決める。 「大川環境シンポジウム」に向けて活動をする。〔検証授業2〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・テーマと、それに迫るための小テーマを決定する。 ・各自テーマについて思考し、自分なりの具体的方策を決定する。 ・小テーマごとに友達の意見をまとめ図説に表す。 ・図説を使って小テーマについて発表会をする。 ・具体的方策について意見を相互に出し合い、見直しをする。 <p>深める</p> <p>「大川環境シンポジウム」を行う。〔検証授業3〕</p> <p>テーマ 「環境を守るために、今私たちにできること」</p> <p>小テーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> 「今、ごみのことでどんなことが問題になっているのか」(現状把握) 「なぜ、ごみの問題が起きているのか」(原因追求) 「なぜ、進んでごみ問題に取り組む人が少ないのか」(原因追求) 「ごみの問題をこのままにしておくとうなるのか」(未来予測) 「ごみの問題を解決するために必要なことは何か」(目標確認) <ul style="list-style-type: none"> ・小テーマの発表をする。 ・クラスの行動案を決定し「大川環境憲章」として発表する。 <p>広げる</p> <p>「大川環境憲章」を実行に移す。(総合的な学習の時間で実施)</p>	 <p style="text-align: center;">検証授業1の様子</p>  <p style="text-align: center;">検証授業2の様子</p>  <p style="text-align: center;">検証授業3の様子</p>

(4) 授業実践による検証

ア 検証授業1(問題解決のための意欲化を図る交流活動)

手立て1 事前に人物やその取組について関心や基礎的な知識をもたせることで、その後の交流活動への意欲化を図る。

- ・「はちがめプラン」で作られた生ごみたい肥を実際に見せて、子どもたちに驚きをもたせる。
- ・ビデオやスライドを見て、子どもたちに「はちがめプラン」や代表の福田さんについての基礎的な知識を与え、それを基に質問計画を立てさせる。

授業後のアンケートで、「はちがめプランのことが分かりましたか」という質問に全員が「分かった」と答えている。また、「はちがめプランの福田さんとの交流は楽しみですか」という質問に対しても、全員が「楽しみ」と答えている。「それはなぜですか」という質問に対しては「はちがめプランのことをもっと知りたいから」「福田さんに直接話を聞きたいから」「すごいことをしている人に会えるから」などの答えが多かった。このことから、手立て1の活動によって子どもたちが「はちがめプラン」や人物について理解し、交流活動への意欲を喚起したと考えられる。

手立て2 ごみ問題に取り組んでいる人物を招き、話を聞いたり、一緒に体験活動を行うことで、主体的にごみ問題へかかわろうとする態度をもたせる。

- ・インタビュー形式で人物の話を聞くことで、主体的に交流活動にかかわらせる。
- ・発熱したい肥を触らせたり、天ぷら油の燃料で動く車に乗るような体験活動を行う。

福田さんへのインタビューでは、事前に基礎的な知識をもっていたため、表2のような深まったやり取りが見られた。授業後のアンケートで「交流は楽しかったですか」という質問に対して、全員が「楽しかった」と答えている。また、「どんなことが楽しかったですか」という質問に対して、多くの子どもが「天ぷら油の車に乗ったこと」「熱たい肥に触ったこと」など福田さんとの体験活動が楽しかったと答えている。(図3参照)さらに、「また交流したいですか」という質問に、全員が「交流したい」と答えている。このことから福田さんとの体験活動が今後の学習への意欲を喚起したことが分かる。

表2 児童のインタビュー活動の様子

児童	生ごみをたい肥にするとき、一番苦労していることは何ですか。
福田	この仕事を楽しんでやっているので苦労とは思っていませんが、はちがめ菌は生き物ですからそれを元気にするための研究が大変です。研究のために毎日取っていたデータがこれです。
児童	そのデータは何のデータですか。
福田	これはたい肥温度なんです。温度が上がったり下がったりしないようにするために水のやり方を工夫します。今では温度は上がったり下がったりしなくなりました。
児童	温度はどのくらいまで上がりますか。
福田	はじめは50度くらいで、最高で80度くらいまで上がります。



児童「天ぷら油からできた燃料で本当に車が動いたよ」
 「すごい。排気ガスがえびフライのにおいがするよ」
 「ふつうの車と同じ乗り心地だったよ」
 「高速道路で100キロ出るんだって」

図3 人物との体験活動の様子

イ 検証授業2 (問題解決のための手掛かりや見つけ直しのための交流活動)

手立て1 小テーマに対する全員の考えをまとめ図説に表すことで、具体的方策の見直しの視点をはっきりさせる。

- ・各自テーマについて思考し、自分なりの具体的方策を決定する。
- ・小テーマごとに友達の意見をまとめ図説に表す。

図4は小テーマについてクラス全員の考えをまとめた図説と、それを基にして作った発表原稿(要約)である。これを見ると、子どもたちがごみを減らすことについて町全体の協力に目が向いていることが分かる。このことは、図説を作成することが、単にクラス全員の考えをまとめるという機械的な作業ということではなく、この作業が子どもたちの思考を必要とした作業であったことを示している。この作業を繰り返すことで子どもたちの社会的思考力を高めることができるのではないかと考えられる。

〔発表原稿〕 ごみ問題を解決する取組には3つあると考えました。まず、使える物は捨てないで何回も使い、再利用を進めることです。またごみをきちんと分別しリサイクルを進めることも大切です。しかし、ごみそのものを減らしていくことは最も大事だと思います。こういう取組を進めるためには町の人が力を合わせてがんばることが大切です。もちろんポイ捨てをしないこともみんなが守らなければならないことです。そこでこの小テーマの結論を「ごみ問題に取り組むためには町の人が協力する」としました。

下線は手立て2で具体的方策の見直しの視点となった部分

図4 小テーマについての図説と発表原稿

手立て2 視点を基に意見を相互に交流し、具体的方策の見直しを行う。

- ・図説を使って小テーマについて発表会を行う。
- ・具体的方策について考えを相互に交流し、見直しを行う。

小テーマの発表や友達の見意見を参考にし、具体的方策の見直しを行った。図5は見直し前と見直し後の変化を表したものである。これを見ると、交流活動により、見直し後の具体的方策はより「有効」「可能」「具体的」な方策に変わっている。また、方策を変えなかった子どもも、より深まった視点で方策を意志決定している。このことから、交流活動での意見の交換が子どもたちの問題に対する思考を高めたことが分かる。

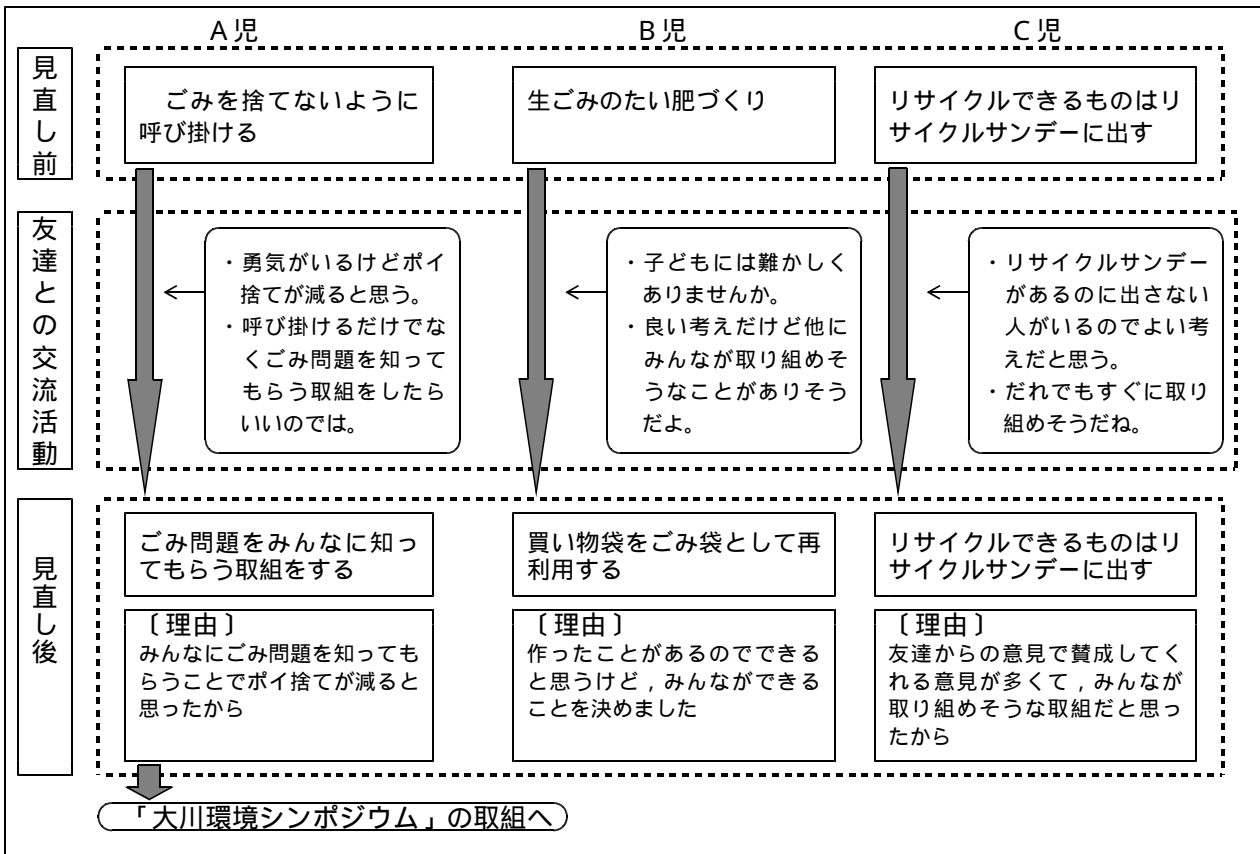


図5 具体的方策の変化

ウ 検証授業3（行動案作成や行動化に向けての意欲を喚起する交流活動）

手立て1 小テーマごとにコミュニティーゲストの助言や指導を受け、問題をより広い視野で見つめ、よりよい行動案の作成の手掛かりにさせる。

小テーマについての発表をコミュニティーゲストに聞いていただき、それについて助言を頂いた。(図6参照) 実際にごみ問題にかかわっている福田さんや、昔のことに詳しいお年寄りの話ということで多様な視点で意見を頂き、子どもたちのごみ問題に対する視点を広げることができた。



お年寄り「通学路に、時々給食のパンなどが落ちています。昔は、食べたくてもなかなか食べられるものではなかったんですよ。」
 福田さん「私たちがはちがめプランに来る人の中にもくさいと言う人がいます。自分たちが出しているごみですから、くさいことは少しは我慢してしっかり取り組むことが大切ですね。」

図6 小テーマの発表に対するコミュニティーゲストの助言

手立て2 コミュニティーゲストにクラスの行動案の作成の話合いに参加していただき、より広い視野で行動案の検討を行わせる。

福田さんとは2回目の交流で、お年寄り
は学校の代行員ということで、自然に子ども
たちの話合いに入っていた。図7
のように子どもの具体的方策について助言
をしていただいたり、一緒に行動案を考え
ていただいている様子が観察された。

ゲスト 「物を大切にしようだけでは分かりにくいよ。」
子ども 「どのようにしたら大切にできるか考えてみよう。」
ゲスト 「買い物をするときのことを考えてみたら。」
子ども 「時々よく考えないで買っているときがあるな。」

図7 行動案の作成でのゲストの助言例

エ 検証授業全体の考察

授業後の実態調査で、図8に示すように、
「みんなで意見を出し合う学習」が楽しいと
思う子どもが増えている。この授業だけで、
子どもたちの思考力・判断力を十分に伸ばし
たとは言えないが、意見を出し合う学習に積
極的になったことは授業の成果だと言える。
また、図9に示すように、授業後、すべての
子どもが地域のごみを減らすための活動に参
加したいと思っている。その理由も、事前の
調査よりも「きれいな町にしたい」「地球を
守りたい」など前向きな回答が多くなって
いた。このことから子どもたちのごみに対する
意識が高まったことが分かる。

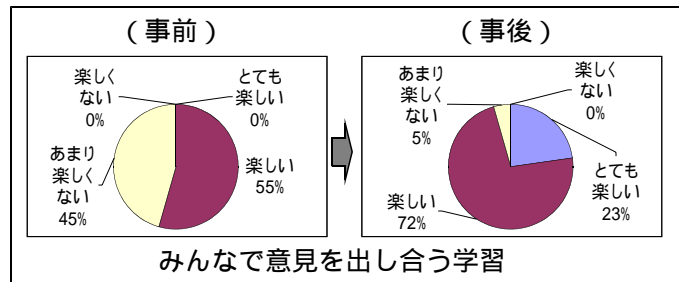


図8 社会科でこのような学習は楽しいですか

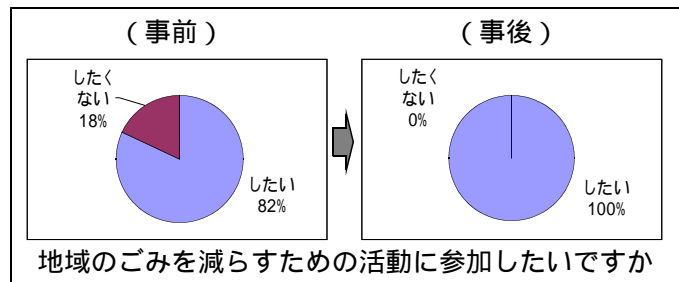


図9 「ごみ」について教えてください

6 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

子どもたちの社会事象に対する認識を深め、より意欲的に学習に取り組むためには、問題解決的学習の交流活動で次のような手立てを取ればよいことが分かった。

- ア 「感じる」過程の交流活動で学習問題を明確にしたり、問題解決への意欲を喚起したりするために、あらかじめ人物についての簡単な知識をもって交流したり、人物との体験活動を取り入れる。
- イ 「調べる」過程の交流活動で、より深まった思考で具体的方策を見直すために、学習問題に対する全員の考えを図説にまとめ、それを手掛かりに考えを相互に交流してから、見直しをさせる。
- ウ 「深める」過程の交流活動で、よりよい行動案を作成したり、行動化に向けての意欲を喚起するために、学習問題にかかわる人物から助言や指導を受けることができるような場を設定する。

(2) 今後の課題

交流活動を取り入れることで、学習意欲の高まりは十分に見られたが、より深く意見を出し合い検討するといった場が不十分であったように思う。今後、子どもたちの思考を高めていくための、更なる指導の工夫が必要と考える。

《参考文献》

- ・ 岩田 一彦 『社会科固有の授業理論30の提言』 平成14年6月 明治図書
- ・ 今谷 順重 『新しい問題解決的学習と社会科の授業設計』 1996年4月 明治図書